

第 98 回 防災カフェを開催しました。



能登半島地震からの振り返り

～能登は社会課題の最前線～

日 時：2025 年 4 月 24 日（木）18 時 30 分～20 時

ゲ ス ト 災害 NGO 結～yui～ 代表 前原 土武 さん

ファシリテーター 災害 NGO 結～yui～ 事務局 西谷 明日希さん

能登半島地震の復旧支援活動内容の報告と現地で感じた課題を共有します。地震自体の被害の大きさに加え、高齢化など従来の課題が復旧を難しくしています。災害がなくても、十年後は能登と同じような状況になるかもしれません。だからこそ今、能登を知ってもらえれば。

緊急支援とコーディネート

大雨で山が崩れたり、困窮世帯がさらに困窮になったり、地域の中に空き家が増えて荒廃するなど、災害は社会の課題を浮き彫りにしています。能登半島は、人口減少と高齢化率という課題がある中で、今回の地震がトリガーのようになって人口減少が進んでいくという課題が見えてきました。平



ゲスト：前原 土武 さん

時から社会の課題に目を向けて、災害を通して地域を考えるきっかけになればと思いながら災害支援をしています。これまで 30 ヶ所近くの被災地で支援活動をしてきました。日本は災害大国だと感じています。能登半島が大変だと思うだけでなく、自分の地域にも降りかかるかも知れないということを考えていただきたいと思います。

私は被災地をバイクで走り回っています。こちらから出向いて情報を集め、困り事を把握して、支援につなげることが大事だと考えています。被災地では被災された方だけでなく、自治体、社会福祉協議会の方も経験のない中で、何をどうして良いかわからず、手探りで復旧・復興が進んでいきます。どういう資源があるのか、外からどういう支援が必要なのかを把握するために、現場を走り回ります。どんなことが起きているのか、どのような社会の課題や地域の問題があるかなど被害の大きさや数字だけではない側面を見ることが大事だと思っています。

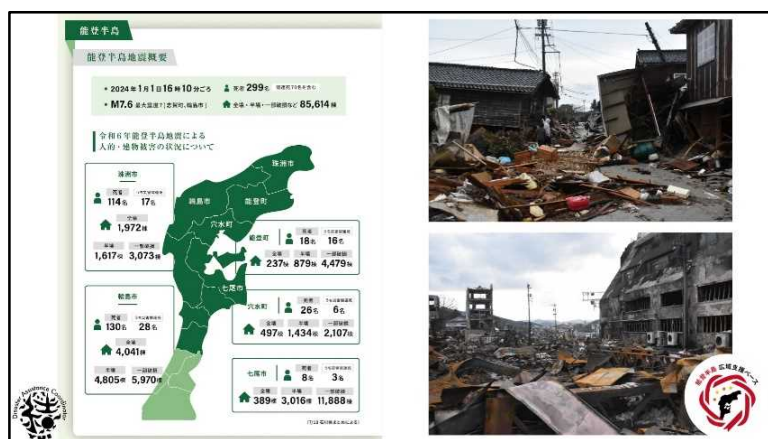
能登半島地震では半島全体が被災しましたので、避難が難しくなっていました。外からの支援も入りにくい状況でした。どういう支援がどれくらい必要なのかを考え、判断しないと、関連死や二次被害が広がっていきますので、初動で現地に入って、コーディネート、支援の見立てをしていくことが大事になります。

災害後のタイムライン

能登半島地震が起きたときに私たちは京都にいました。滋賀県の拠点に立ち寄り、ストーブや寝袋などの物資を積み込んで、1月2日に石川県庁に入ったところからが支援活動を始めました。各地で災害支援をする中で、拠点をすることが大事だと考え、沖縄県、佐賀県そして滋賀県の三か所に拠点をつくっています。青森から鹿児島まで1000キロ圏内に入るのが滋賀県です。また南海トラフ地震が起きたときに、沿岸部に支援に入るために内陸に拠点を置きたいと考えて、空き家をお借りして資機材を置いています。翌日の朝8時ぐらいに石川県庁の災害対策本部や災害ボランティアに出向き、昼には七尾市、穴水町、夕方6時前には能登町の役場に到着しました。

翌日には能登町の職員の方との相談を済ませ、津波被害が大きかった地域の状況把握をしました。昼過ぎには仲間が九州から車3台に資機材や支援物資を積んでやって来てくれました。バイクも運んで来てくれたので、4日から各地を回り、被害の大きかったところの情報収集を行いました。

各地を回っていく中で、被害が奥能登と呼ばれている能登半島の末端の珠洲や輪島に集中しており、倒壊件数も多くなっていることがわかりました。次に見えてきたことは高齢化率です。高齢化



率が50%を越えているのは珠洲市、能登町、輪島市が46%、そして穴水町でしたが、高齢化率が高いところに被害が重なっていました。

現地を回って、いろいろなことが見えてきました。志賀町では倒壊している軒数は少なかったのですが、瓦がずれているお家が北部で広がっていました。

ブロック壁が倒れているところもありました。奥能登に入ると、倒壊した家が道まではみ出ている、通れなくなっていたり、マンホールが1m近くも飛び出ていました。4日の昼に輪島の中心部に入りましたが、朝市は焼けてまだ臭いが残っていました。珠洲では、いくつもの家が倒壊して、道の向こうに行くためには屋根の上を登っていかないと行けないような所が、多くの地域で広がっていました。津波被害を受けた地域では捜索活動が続けられていました。能登町から珠洲市に向かう県道は、津波によって道に亀裂が入っていたり、崩れて通れなくなっていました。通れるところを確認しながら走るという状況でした。

断水状態も長く続いている状況でした。元気な方々は給水車に並んで水を確保していましたが、障がいのある方や高齢者の方たちは水を汲みにも行けない状態でした。また避難所には小さな子どもたちも多くいました。普段子どもはいない地域ですが、年末年始で帰省されていた方々も被災されたため、避難者が増えていました。地域の方々は助け合って、避難所の運営をされていました。さらに雪や寒さと向き合っていないといけません。現地を回りながら何が必要なのかを、仲間た

ちに伝えながら対応していきました。福祉施設では灯油が手に入らない、食べ物もないなど、いろいろなことがわかりましたので、物資や灯油、軽油を届けたり、発電機をお渡ししたりしました。

被害の特徴と課題

東日本大震災は海底で地震が起き、津波がやってきて、千葉から青森までの約 500 キロの沿岸部が被災しました。しかし津波被害を受けていない地域から支援に入ることができましたし、原発事故という大きな課題も抱えていますが、海岸近くの方は陸の方に避難することができました。熊本地震は九州の中央部でしたので、他県から被災地に支援に入ることも、県外に避難することもできました。2回の震度7の地震が起き、倒壊件数が多かったことが熊本地震の特徴でした。今回の地震は半島という立地が悪いところで発生し、輪島から珠洲にかけて4mの隆起がありました。そのため海からも被災地に入れませんでした。陸では山が崩れて、通れる道路も限られていたので、南から被災地に入ろうとして大渋滞が起きました。1月1日ということで、行政の方、災害対応する方を含めほとんどの方がお休みの中で、災害が起きたので、招集されてもすぐに役場に出てこられない方もいたと思います。反対にこの地域に里帰りされていた人たちもおられたので、避難者数が増えました。寒さをどう乗り越えるかということでも大変でした。

多くの道路が崩れてしまったので、物流、食料の配達が難しい、水、電気、トイレの復旧にも時間かかると想定されましたので、活動の拠点をつくりました。高齢者の方が多く、若者が少ないため、助け合いをするマンパワーを地域内で集めることが難しい状況でした。公費解体業者、大工さんなどの支援者を受け入れる宿泊場所を確保することも難しかったです。半島で人口も少ないため、大工さんや設備屋さんがもともと少なく、復旧が難しくなることが想定できました。復興には時間がかかりますので、連携することが何よりも重要と考えました。この地域は祭りを大切にされていたので、キーワードとしての『祭り』、『まちづくり』が重要だと様々な人たちに伝えていきました。

助かったモノを救う

9月にもう一度大きな災害に襲われました。梅雨前線の影響で大雨が降り、山が崩れ、流木が流れてきて、多くの家が流されました。孤立した地域もあり、仮設住宅も被害を受けました。家を修理している最中に被災したという方もいました。心が折れそうだが、心が折れたということのをこれ程聞いたことは今までにありませんでした。少しでも関連死を減らしたい、助かった方を救うことをミッションに掲げて支援活動を行っています。いつもは泥かきや、災害ボランティアセンターの仕事を、NPOとしてやっていることも多いのですが、今回は炊き出しの調整や食料を届けることに

発災直後の課題	
アクセスと道路状況の悪さ	→ 物流・食料配達などに影響
インフラ整備が遅い	→ 水・電気・電波・トイレの環境整備が難しい
避難所や車中泊の環境	→ インフルエンザ・寒さ・エコノミー症候群
季節の変わり目	→ 1月～3月と雪が降る季節（寒さ）
支援者が少ない	→ 高齢者率が高い・若者が少ない
支援活動の受け入れ	→ 宿泊場所の確保や活動内容の難しさ
復旧の難しさ	→ 大工や設備屋など業者が少ない
被害が大きい	→ 仮設住宅が建つ・町を作る



取り組んだり、地震で倒壊した家の中から貴重品を運び出したり、車も 300 台近く運び出しました。地域コミュニティをサポートすることや、お茶会を開いたり、お酒造りや漁業、農業、観光業のお手伝いもしました。様々な企業や団体、ミュージシャン、アスリートの方々のご協力もあり、1 年で約 12,000 人の方々が私たちの拠点の支援活動に関わってくださいました。

広域支援ベース

七尾市から廃校になった小学校をお借りして、物資を集め、宿泊場所を整え、ボランティアの方が寝泊まりできるようにしました。ここから輪島、能登、珠洲などに物を届けながら支援活動を行いました。“～yui～結”のホームページから中間報告書をご覧ください。行政だけでは対応が厳しい、社会福祉協議会のボランティアセンターだけでは厳しかったこともありましたが、様々な方の力をお借りして活動していきました。1 日 70 人から 80 人ぐらい寝泊まりできる環境を整えました。ゴールデンウィークには一日 130～140 人ぐらいの方々が、支援活動をしてくださいました。長崎から来てくれた小学生や鎌倉からお子さんたちを連れて参加されたご家族もありました。すぐには修復できない道路を県と相談をして、最低限緊急車両が通れるように開けるために重機を使った作業を何度もやりました。

避難住民で毎日炊き出しをすると、疲労もたまっていきますので、週に 1 回は炊き出しをお手伝いしました。カット野菜を届けて、少しでも炊き出しが楽になるようにしたり、長野県の渋温泉から 8 トンほどの温泉を届けてくださったので、施設などに届けました。酒蔵から被害を免れたお酒や酒



米を運び出して、お酒づくりを支援したり、倒れかかっているブロック塀の撤去なども行いました。企業の方々と一緒に、ワークショップで廃材からお箸を作ったり、思い出を少しでも持ってもらえるように、倒壊した家の柱を使って表札を作ったりしました。地震後に建てた築 5 か月の家も水害に襲われました。若い世代がこの地域で頑張ろうとされていたので、泥を取って少しでも住めるようにしたり、被災後も営業されていたスーパーが水害に襲われたので、多くのボランティアで流木を取り除いたり、泥かきをしました。11 月には再オープンして、地域の方やボランティアの



方が集まる場所になっています。大阪の生協さんがたこ焼きをつくって提供するという大阪ならではのアイディアで支援をしてくださいましたし、長野から送っていただいたリンゴを皆さんと一緒に食べたり、温かい飲み物を飲んでほっとしてもらったこともしました。

広域で被害が起きた時には、できるだけ現地

に近いところに拠点を置いて、様々な関係機関と連携して、NPOだからこそできる支援活動をしています。支援活動で大事なことは、何をするかではなくて、何を見ているかだと思っています。被災した方の心が変化する、その心を気にかけて、一緒になって活動することで、元気や明るさ、希望を支援できると思っています。1年3ヶ月が経ち、地域の中では孤独感を感じている方、不安を抱えている方もいると思いますので、お茶会やサロンを開くことも大事です。被災したときには、まず命を守るために避難生活が始まり、そして仮設での生活、そして生活を建て直していくこと、自立していくことがゴールだと思います。

被災から再建

最初は片付けや土砂撤去、廃棄物の搬出ということが多いですが、少しずつまちづくりや、仮設住宅の暮らし、コミュニティをつくることに変わっていきます。最終的には外部の支援者はいなくなっていきます。1年目が終わり、2年目となると様々な団体が撤退していくこともあります。引き継ぎをしながら、地元の方々が力をつけていくことが2年目の大きな課題だと思っています。

一人ひとりで片付けても時間がかかりますが、たくさんの人たちが関わることで効率よく復旧していきます。支援をするためには、調整する人が必要不可欠です。災害ボランティアセンターの方々が調整して、初めて直接支援する人が活躍できます。直接支援する人も誰かが調整してくれないと思うように活動できません。片付けを手伝う人、NPO、看護師や介護士のような方、壁や床を剥がす人、重機を使って土砂や廃棄物を撤去する重機系のボランティアの方などがいらっしゃいます。大学生の方がボランティアセンターの運営をフォローするといったこともありました。支援金や義援金、クラウドファンディングなどで活動を支えてくださるということもあります。

被害が大きければ大きいほど、再建する厳しさがあります。復旧が効率的に進むだけでなく、少しでも関連死を減らすために、被災者に寄り添うことで元気になっていただけるようにしたいと思います。過去の被災地からたくさんのボランティアの方が駆けつけてくれています。かつて被災した方が多くの人たちに応援してもらって、前を向いて進んでいったからこそ、今度は支援者になってくださっていると思います。能登半島の人たちも今は大変ですが、復旧、復興に向かって進み、次は能登からどこかの被災地に来てくださるようになっていく、価値観を変えて前に向かっていくことが支援を受けた人たちにはあると思います。

“～yui～結”の活動

復旧は元に戻すイメージですが、復興は機能を取り戻していくことです。地域が地域らしく、田畑の機能を取り戻していく、回覧板が回り、お祭りなどが始まっていく中で、復興を目指していくことが大事だと思っています。ただ現実には厳しくて、災害の被害があったところは、元のところまで戻れなくなっていることもあります。高齢者の方、年金暮らしで切り詰めて生活していた方などは元の生活水準まで戻れないという人もいらっしゃいます。障がいのある方など弱い立場の方々も元の状態まで戻れなくなってしまうかもしれません。能登半島では高齢化率が高いです。70歳、

80 歳の方々は家を再建されない可能性もあります。仮設住宅や復興公営住宅に入ることを選ぶ方も少なくないと思います。そうなったときに地域の中に空き地、空き家が増え、集落をどうやって維持していくかということが大きな課題になると思います。

“～yui～結”としては、1 年目は助かったものを積極的に救う、そして2 年目は助かった命や暮らしやコミュニティ、産業を維持するために活動しています。そして3 年目は新しいものを生み出すためのお手伝いをして、少し離れたところから応援して、最終的には自立いただけることが大事だと思っています。復旧・復興はまだまだですから、支援の調整をしたり、寄り添い活動や自立や共助のサポートをしたり、産業支援をやっていきたいと思っています。私たちは調整を得意としている団体ですので、地元の団体や企業を支えることが大事だと思っています。私たちが表に出るのではなく、外から来た人たちをうまく調整して支える、地元の人たちを支えていけるようにしていきたいと思っています。

現代社会の課題と変化する災害支援

私たちの周りには多くの社会課題があります。担い手がなくなったり、高齢化が進んだり、子ども食堂が広がるなど、自助や地域の力が弱くなるとともに貧困世帯も増えてきています。外部団体が入りにくく、共助が入りづらい地域もあります。公助も広範囲に合併したことによって、守備範囲が広くなりました。だからこそ私たちはどうやって助け合うかを考え、連携する必要があります。能登半島で気づかされたのは、人口が減少していく中でどうやって地域と暮らしを維持していくのか、もしかしたら私たちが求められている数十年後の大きな問題なのかも知れません。それを災害が浮き彫りにしてしまったと思っています。

阪神淡路大震災の発生した 1995 年はボランティア元年と呼ばれ、NPO法ができました。2004 年の中越地震では、社会福祉協議会が災害ボランティアセンターを立ち上げるという動きになりました。マンパワーが必要になった時に調整する機能、コーディネーターが必要だと言われたのが東日本大震災でした。更にNPOと社会福祉協議会と行政との連携が必要だと気づかされたのが熊本地震でした。コロナ禍で外からの多くボランティアが入ることが難しく、地域の中で助け合うことの重要性に気づかされたのが、令和2年の熊本県人吉の水害でした。今回の能登半島地震で、できたこと、できなかったことをしっかりと振り返ることが大切です。南海トラフ地震への対応を考えて、滋賀県の拠点を強化していくこと、人材を育成していくこと、そして能登半島の中長期的な支援をしていくことを“～yui～結”ではやっていこうと考えています。今年も水害や地震が起きるかもしれませんので、いつでも動ける体制をつくり、中間支援の団体や行政の方々との連携を強化していきます。有事のときに動けるように、平時から顔の見える関係性をつくりたいと思っています。そして災害支援の専門家が少しでも増えるようにお手伝いしたいと思っています。能登半島で起きたことが、自分の地域に起きるかもしれないということを考えて備えを心がけてください。そしてこれからも能登のことに関心を持ち続けてもらいたいと思います。

参加者からいくつか質問がありました。その一部を紹介します。

問:被災地で行政の職員と協議されたこともあるかと思いますが、行政側にはこういうときにこういう動きをしてもらう方が良いと思われたことや望むことがあれば教えてください。

答: (前原さん) 総務課や災害対策本部などに、NPOの窓口担当の方を置いていただき、いろいろな部署につないでくださればやりやすくなります。できれば災害が起きたときのNPOの対応窓口を受援計画の中に入れておくの良いと思います。普段からやっていることが防災につながり、災害対応につながっていくと思います。災害が起こった時には、平時にしていることしかできません。普段から助け合っているからこそ、助け合いが強化されると思います。平時から顔の見える人と地域の中でのつながりをつくってほしいと思います。

(西谷さん) 行政、NPO、企業、社協それぞれに得意なところと不得意なところがあると思います。重なり合うことで穴が埋まり、できる幅が広がると思います。平時から顔の見える関係をNPOや社協や企業の方々とつくり、訓練をしておくの良いと思います。

問:被災地の中で障がいのある方の避難生活はどのような状況でしょうか。特に知的障がいの方は周囲からは普通に見えるのですが、いろいろな課題もあり、大勢の中に入れないという子どもも多く、避難計画が立てにくく、イメージがつかめません。

答: (前原さん) 停電していても避難所に入らないで、在宅避難している方も多かったと思います。環境が変わると、なかなか理解できないため、どうやって避難してもらうかとても大変だったと施設の方から聞いたこともあります。ご家族の方は、他の方々から援助を受ける力、受援力を普段からしっかりとつけておく、家族だけでは厳しくなることを想定して、近所の方や行政の方に相談をして、何かあったら助けてもらえるような環境を整えていくことが、平時からできることではないかと思います。

問:防災用品として発電機や充電器がありますが、どのようなものが良いでしょうか。

答: (前原さん) 災害時だけでなく、普段から使えるものが良いと思います。ポータブルバッテリーは容量も大きくなっていますので、どういうことに使うかによります。携帯電話を二、三日使いたいのであれば小さくても良いと思います。便利なものがなくなってしまうのが災害です。便利さは身近にあると気づかないので、ガスや電気、トイレなど、いろいろなものの大切さを感じて、備えを考えると良いと思います。

(西谷さん) シガーソケットが役立ったという話を聞きました。シガーソケットを利用して車から充電できるということを若い方に教えてもらったので、携帯を充電して家族に連絡できたと話してくださった高齢者の方がおられました。また携帯トイレをぜひ備えておいてください。一番困るのはトイレだと現地の方は口を揃えてお話しされています。

問:女性や子どもは避難所で性的な被害を受けることがあるとニュースなどで見聞きしますが、現

実にそういうことが起こることはあるのですか？

答: (西谷さん) 今回は女性が被害を受けた話を聞いていませんが、夜はトイレに1人で行かない、暗いところには行かないことなどは気をつけておいてください。東日本大震災や熊本地震では、実際に被害があったと聞いています。様々なものが壊れてしまうのが災害です。周りも気をつけないといけませんから、どういう避難所にするかを考えないといけないと思います。

(前原さん) 能登ではお互いを知っている、なじみのある方々が協力して炊き出ししたりするなど連携が強い地域だったので、そういうことが起こりにくい環境だったと思います。女性だけの問題ではなく、周りの男性やいろいろな方たちがそういうことが起きないように、みんなで考えてもらいたいと思います。



ファシリテーター：西谷 明日希 さん

前原さん、西谷さん、参加者のみなさん ありがとうございました。